HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ご退職記念号に寄せて
著者	小松，かおり；KOMATSU，Kaori
引用	北海学園大学人文論集(74)：1-7
発行日	2023-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ご退職記念号に寄せて

人文学部長　小　松　かおり

本学人文学部英米文化学科の米坂スザンヌ先生と安酸敏眞先生，日本文化学科の寺田吉孝先生は，2023 年 3 月 31 日をもって長く教鞭を執られてきた北海学園大学を定年退職されます。ここに，3 人の先生方の本学・本学部への多大なご貢献に感謝の意を表し，送別の辞を述べさせていただきます。また，慣例に従い，本学への着任順にご紹介させていただきます。

米坂スザンヌ先生は，1983 年 8 月にサンフランシスコ州立大学大学院で，英語学の修士号を取得され，札幌大学女子短期大学部勤務を経て，1992 年 4 月に北海学園大学教養部に助教授として着任されました。1993 年には，人文学部が創設されると同時に英米文化学科助教授に着任され，2002 年からは教授として，さらに 2005 年より文学研究科の教授としても教鞭を執られました。

米坂先生の研究分野は外国語としての英語教育であり，そのテーマは，「留学による学習効果」,「英語学習ニーズ分析」,「EFL 教育における異文化・多文化主義」,「指導法と教員の信条」,「学習者の観念」,「発音指導法」など多岐に及び，本学に着任前からから現在まで休むことなく，学会の研究大会で，また論文として，英語教育に関する発表を続けてこられました。

米坂先生の研究は，人文学部創設以降の英語教育の基礎となりました。英語音声学，英語学概論Ⅱ（応用言語学），大学院では修士課程英語学研究特殊講義・演習などの科目を担当され，先の研究を充分に活かした応用言語学の講義・演習を展開する一方，数度にわたる学部専門科目英語教育プログラムの策定に関わられ，中核メンバーとして運営を担われました。近年では，英語音声学の授業で展開している発音指導で研究を重ねられ，本

学の語学教育用学習管理システム（Glexa）において独自の拡張機能（P-Check）を開発し，学生が相互の発音を評価することで協働的に学習できる環境を実現されました。また，人文学基礎演習，人文学演習，人文学専門演習と卒業研究まで，学部の一連のコア科目を担当され，人文学の教育に貢献されました。

また，米坂先生は，本学の提携校であるカナダ，レスブリッジ大学，ブロック大学における留学･語学研修プログラムの中核を担われ，レスブリッジ大学専門委員会委員，学部内ブロック・レスブリッジ大学委員会委員として，また，ときには役職を超えて，提携校担当者との連絡，調整，派遣学生の指導に献身的に携わり，多くの学生のカナダ留学実現に貢献されました。

大学運営では，教務委員や情報関係の多くの委員を務められたほか，特に，語学教育・国際交流関係においては，学内・部内の複数の委員を継続して務められ，人文学部の語学教育の地道なインフラを担われました。さらに，長きにわたり英語の入試出題委員を務められ，本学独自のリスニング問題の作問を中心的に担われるなど，本学における入試出題業務への功績も特筆すべきものがあります。

学外におかれても，北海道教育委員会新教育計画検討会議委員（1996-1998 年），北海道英語教育推進会議委員（2013-2014 年），北海道インターナショナルスクールの評議委員，理事会監査（2004-2013 年）を務められ，本学のみならず北海道の英語教育と国際教育の発展に貢献されました。

米坂先生が赴任されて 1 年後，人文学部が設置されたのですが，その際，アメリカ，イギリス，カナダなどから招かれた 8 人の英語母語話者の先生方がいわゆる「准専任」として着任されました。米坂先生は，ご自分の授業を担当される一方，准専任の先生方と協力しながら学部の英語教育を運用するという難しい舵取り役を担われることになりました。また，大学が借り上げた建物で暮らすこれらの先生方の暮らしのサポートも一手に引き受けられたとうかがっており，小さなお子さんを育てられる中で，公私の別のない怒濤のような日々であったと想像します。そのような中でも，米

坂先生は，本学部のさまざまな学生に必要な英語教育とは何かを個別に考え，実践してくださいました。これまで先生の指導を受けた卒業生は，北海道をはじめ各地で中学校・高等学校教員，大学教員として活躍しています。英語の学びを求める学生にとことんつきあわれた先生の献身は，本学部の卒業生のみならず，彼らが教員として関わる多くの生徒たちにも，多くの実りを与えることでしょう。

寺田先生は，1980 年 3 月に大阪外国語大学大学院外国語学研究科ロシア語学専攻修士課程を修了され，大阪繊維学園向陽台高等学校，津田学園津田中高等学校で教鞭を執られたのち，1992 年 4 月に本学教養部の講師として着任されました。1996 年に助教授となられ，1998 年からは大学の改組によって共通教育・研究センター教育研究部に所属されたのち，2001 年から経済学部教授，2004 年から経営学部教授を経て，2008 年からは，わが人文学部の教授として，また，2017 年からは文学研究科においても，教鞭を執られました。

寺田先生のご研究は，1982 年に発表された「18 世紀末から 19 世紀初に至る期間のロシア標準語における語彙構成の変化」以降，ロシア語とロシア語教育，ロシア文化に関する幅広い分野を網羅されています。また，1997 年から 2019 年までかけて 19 世紀のロシア人軍医ドブロトヴォールスキィによって収集された樺太アイヌの語彙や文化が記された『アイヌ語・ロシア語辞典』を共訳され，その成果が 2022 年 11 月に千ページを超える『ドブロトヴォールスキィのアイヌ語・ロシア語辞典』として共同文化社から出版されたところです。この辞典は，19 世紀半ばの樺太アイヌのことばと文化を知る貴重な文献であり，今後のアイヌ文化研究に大きく貢献することが期待されます。また，ウクライナ語についても論文を執筆されるなど，幅広い分野の研究を発表されました。

教育分野では，北海学園大学で唯一の専任ロシア語教員として着任されて以降，一般教育科目のロシア語とロシア文化の多くの科目を担当され，教科書も複数執筆されました。また，ロシア語母語話者である非常勤の先

生方と協力して一般教育のロシア語全体をコーディネートされてきました。人文学部に所属なさってからは，それらの科目に加えて，１年生向けの人文学基礎演習，２年生向けの人文学演習，大学院の比較言語研究特殊講義を担当され，人文学・教養教育に大きく貢献されました。

大学運営では，人文学部教員として教務委員，入試委員などの多忙な業務を分担される一方，一貫してロシアとの交流事業の責任者としての役割を果たしてこられました。本学に着任して間もない 1994 年よりヴラヂーミル大学での語学研修（4〜5 週間）を企画され，学生を自ら引率して計 14 回，延べ 134 名にのぼる学生を引率されました。参加学生からは，ロシアに関係する仕事に就く者も多数輩出しています。加えて，交流協定のあるシベリア交通大学，サハリン大学，ノボシビルスク総合大学，ヴラヂーミル大学の 4 校から，例年合計 9 名程度の学生を約 90 日間受け入れるにあたり，2011 年より世話役として中心的な役割を担われ，双方向の交流を支えてこられました。

学外では，日本ロシア文学会では理事（2015〜19 年）および北海道支部長（2017〜19 年）に加え，現在も札幌青少年国際交流協会では幹事を務めておられます。さらには，ウクライナ赤十字社ハルキウ州支部機関誌『Червоним по білому』編集委員を務めておられます。

寺田先生は，ソ連崩壊前後から，ロシアとウクライナに何度も滞在されていらっしゃいます。特に，ウクライナ東部のハリコフにはご縁が深く，親しい方も多いとうかがっています。2022 年 2 月 24 日以来のロシアのウクライナ侵攻後の寺田先生は，ロシアに対して，また，状況を解説する報道に関して，怒りを表されることがありました。ロシアとウクライナの歴史を熟知しておられる寺田先生にとって，日本で報道されるニュースの表面的な解説にはとうてい納得できなかったことと拝察します。寺田先生のご退職を控えた 2023 年 1 月 21 日には，寺田先生がコーディネートされた第 10 回人文学会「言語と文化からウクライナを理解する」が開催されました。寺田先生がウクライナ史とウクライナ語を概説してくださるとともに，ウクライナ出身で日本在住の研究者の方のウクライナの教会建築のご

発表，現在も爆撃を受け続けているハリコフ在住の旧知の研究者の方から送られてきたウクライナの言語使用状況とエスニック・アイデンティティに関する論考の代読など，学びの多い研究会となりました。このような学びの場を提供していただいたことを，深く感謝いたします。

安酸敏眞先生は，1980 年 3 月に京都大学大学院文学研究科宗教学専攻で博士課程を単位取得満期退学されたあと，アメリカのヴァンダービルト大学大学院博士課程宗教学専攻に入学され，西ドイツのゲッティンゲン大学神学部への留学を経て，1985 年にヴァンダービルト大学大学院博士課程を修了と同時に Ph.D. を授与されました。その後，1987 年 10 月から盛岡大学文学部助教授，1993 年から聖学院大学人文学部の助教授，1996 年から同教授を経て，2004 年に北海学園大学人文学部に着任されました。1997 年には，京都大学から二つ目の博士号（文学）を授与されています。

本学に着任後は，みなさまご存じのとおり，2010 年から 3 年間の人文学部長，2014 年から 3 年間の図書館長，2017 年から 6 年間の北海学園大学学長を務められ，2021 年 6 月からは学長とともに学校法人北海学園理事長を兼任されています。

安酸先生のご研究は，キリスト教学を中心に西洋思想史全般にわたります。トレルチ『信仰論』，ベーク『解釈学と批判』，シュライアマハー『キリスト教信仰』といった古典的著作を翻訳されたご業績に加え，ご自身のご著書が国際的に高い評価を受けていらっしゃいます。1987 年にオックスフォード大学出版から American Academy of Religion アカデミー・シリーズの 1 冊として出版された “Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicality” と，1998 年に創文社から出版された『レッシングとドイツ啓蒙 ── レッシング宗教哲学の研究 ──』が，最もよく知られたご業績です。前者は，1987 年日本宗教学会賞を受賞され，後者は，これを元に，2002 年に American Academy of Religion の Reflection and Theory in the Study of Religion Series の 1 冊として “Lessing’s Philosophy of Religion and the German Enlightenment: Lessing on Christianity and

Reason”がオックスフォード大学出版から出版され，世界的な名声を獲得されました。

人文学部・人文学研究科の教育としては，本学部の基幹科目である「人文学概論」を担当され，現在も教科書としてすべての人文学部生がテキストとする『人文学概論』を執筆されるとともに，文学研究科はじめての課程博士号取得者を指導されるなど，基礎教育から博士課程教育にいたるまで，人文学部・文学研究科の教育の根幹を担われました。また，演習科目では，英語やドイツ語など，「原書を読む」ことを重視され，学生の学力の基礎をとことん鍛えられたとうかがっています。

安酸先生の本学への貢献として特筆すべきは，やはり，人文学部長，図書館長，学長としてのご功績です。人文学部長としては，2014 年度カリキュラムの改訂において，人文学部の開設以来の理念である「新人文学」「新人文主義」を検証し，カリキュラム改訂の理念を作られました。この理念は，現在も人文学部の基礎であり続け，現在検討中の新カリキュラムもその理念を踏襲しています。図書館長時代には，収蔵庫を圧迫していた図書の除籍に道筋をつけられ，図書館の機能性を高められました。

学長としてのお仕事は，とてもすべてを網羅することはできませんが，まず，大学のありようを表明する「ミッション・ビジョン」を策定し，本学の向かう方向性を定められたことが挙げられます。また，学長ガバナンスを支えるために設置された，学長を補佐する副学長と学長室は，学長の機動力を上げる大きな変革でした。

安酸先生の学長任期後半は，2020 年はじめから世界で猛威を振るった新型コロナウィルスによって，大学機能が麻痺しかねない難しい時期が続きましたが，安酸先生は，コロナ禍で困窮する学生たちへの奨学金を拡充するために，教育振興基金への寄付を広く大学ウェブサイトで呼びかけることを決断され，その結果，個人だけでなく地元企業からも多くの寄付が集まりました。また，レスブリッジ大学とのダブル・ディグリープログラムの協定を締結されるなど，学生の学びの場を拡げられました。

われわれ教員にとっては，この数年間で，学内研究費の使い勝手が格段

によくなり，科研費への再応募のための助成金が新設され，在外研修制度と国内研修制度が整備されるなど，研究環境が整備されたことに大変感謝しています。

わたしが学部長として安酸先生のお仕事を間近で拝見したのは最後の１年でした。その中で，最も印象に残っていることのひとつは，ロシアのウクライナ侵攻後，ウクライナの大学生を本学へ留学させるために安酸先生が奔走されたことです。さまざまな事情でかないませんでしたが，安酸先生の情熱と大学というものがどうあるべきかという理念の強さを感じたできごとでした。

米坂スザンヌ先生と寺田吉孝先生には，本学における多大な貢献に鑑みて，2023 年 4 月 1 日付けで，北海学園大学の名誉教授の称号が授与されます。また，学長でいらっしゃる安酸敏眞先生は，ご自分の名前で名誉教授号を授与することができないため，ご退職後にこの手続きが進められることと思います。

人文学部英米文化学科の柱である英語教育を作り上げてくださった米坂先生と，本学唯一のロシア語専任教員として長くロシア語教育を支えてくださった寺田先生，学部長として，また学長として大学を支えてくださった安酸先生という 3 人の先生方が同時に退職されることは，人文学部の教育にとって大変心細いことですが，残されるわたしたちは，次世代を託される者として，後任の先生方を支え，先生方が守ってくださった英語とロシア語の教育を守り，また，新人文学を発展させるため，力を尽くす所存です。先生方の本学での最後の 3 年間はコロナ禍で，懇親会などの機会にゆっくりと，研究のお話や，お忙しい中で研究や教育，そして日々の暮らしを大切に暮らされる秘訣をお聴きできなかったのが残念です。これからも，本学部の催しに是非顔を出していただき，そんなお話を聞かせていただけると嬉しいです。先生方の今後のますますのご活躍とご健勝を祈念して，献辞に代えさせていただきます。